





杯 辨 謂 是 歟 一 本 哥
ニ 十 一 字 あり とい へ 陰 陽 を
の こ どり 上 下 二 よ り され
い 天 地 人 和 合 して 弟 弟 を
と ころ あり ゆ かり を 狗 中
より け け り 割 せ ぬ 又 二 十
字 一 又 字 一 字 の 題 を 加
飾 の 二 十 二 相 と 表 する だ
云 へ り 五 七 五 七 と 五 白 子 分
す べ し 神 十 七 八 地 神 五
代 五 色 幣 飾 とい け 五 智
め 来 五 の 一 一 一 儒 子 一
五 帝 の 聖 徳 仁 義 礼 智

信より凡五負のたをへわの
縁身余の因を之能皆は虚を
為とすきいあさるるたを
やうなれとと虚い実の裏
虚実の二なるそい和可の
朽るまふも見しに
ぬるは波とあはるる虚淨
水の實也滯るる海とぬと
なく歩海ならんか獲き眺
を身よしてまのるは色
ありたをい測ると云よな
ぞこれ能く論まあする白波
い風よんらる松の雪りとあや

はらるるは船の小舟の有る無の
ほうさ他は波の喧門のせれ
中と後るる表のいくばくの乾
ひさるる力もつてかる業とめと
と人のるのたのあさるるを目前
ましく菩提の念起る則い
森羅の万象の連ひ包雲と
晴波とちり風と吹すまこと
実おま漏の法ある清淨は
あはるるると起るる又殊と云
併といひ水波の面をてとい
実の代るは身らん人の念佛
海をむまはらして掉のる

は吊りたる伊勢海を垂す
て決の川内流よ叶ひ法礼停
止すして仁義は智の守元世
お徳は生善所の祈と八景
を世にやるるゆゑにおろの
あるもしと世に流るるの守
一連歌は八景者十六脚二十四脚
四十の脚は到り八十脚と留まり
能滞も誰之流たを世に流るる
只八脚を所要とする也

乎四風詞達心對埋

是(是)と部の書は宗猿是流

そりそとくけて季吟埋木
を作りて古縁十脚をけ免
忠能句よせてま能のりけ
と見せし世にあらん人能
る留りて見たまふへ
一我多入季久く才ある伊勢の川
吹あり世にあらん人能
存るまはある時の下向はる武
能滞の書として白雲の一巻
をよとんせしむるより能滞
のよのかまは則これとん流て
和指平世向のよとあら能滞
いまよのたかよとらひてせる

の物残立るの事と云ふは唯て
はのうするは法度以下に因ひ
まらる通一の終まき等の解と
どりて一句を仕立んる事
濼滑の付るがひ各列の所
ある一と云ふよりして心
先は濼滑の解とある
あつりすとて八の品とあけて
さほく付句の終付り終
はのお原曰代と傳るを實家
はと志のて終るを初まは是
つらまお撰て勢見す人
のつすと創的付きんあつら

さぬも歌一が一志のあき共
地ながまを志といきん人のあま
余おのつとてとてととと
曰て守武あるの中よりけふ
よけひらる句ととりおとて
お係付る凡地と思ひ唯て
其の品とてとてとてとて
守武家の書 八の品号て曰
寓言 風情 奇てあむ
たのりてたぬる 初まあは
ふせとつら 終る言
是也

寓言

くら月の月い熊坂とねし
 ぐんたふと歩くと歩い唐衣
 宇治のあつりは針い尺け
 何一箱い箱あお治の妹まで
 風引といひ犬なりとりひ
 目の本よ美玉の美鼻をひて
 くやーとこやーハえ腹はあり
 くら遊やんこころ敵と時ぬん
 武士の多相の首よちをかし
 具足とてんまに滝のしし魚
 僧しそいを船作るも経路
 ち母もあつたあつたの皮

高きめあつたあつたあつた
 ちけらるた方の法ああつた
 妻も卒都婆あつたあつた森の
 若菜つむま田ふ理の小所まで
 月よむあやのしつまるん
 渡舟の本の人丸秋更て
 礼をせしむぬさいて中お
 年よあつてあつたあつたあつた
 めくりしあつたあつたあつた
 いけあつたあつたあつたあつた
 たいあつたあつたあつたあつた
 あつたあつたあつたあつたあつた
 あつたあつたあつたあつたあつた

たごの塔屋の尺八乃尻

風情

春のあけのぼる後には付合
むい風騒いこを船の昔の中
林麓の里へせりするさころ
るいーとんお田の外様は飽
ちろくちろくよこそ家こくれ
をれくとんおよりさそー又
いおおちやおのあさうま
初耳入の乃のるこのむささ
志やろろこらり命やんり
鏡とびとせの中山を日てん

春の海舟とてやとるん
松の葉ふこーよまおろーす此
のころあかほらの屋の朝朗
うちり日さよてはらのまをん
二見の浦とてゆりくらあを
首おとと舟後のおやあをん

あつてちの母

伊代もさううあやあつがり
大方しやそこいせとちの山見
お玉娘やと秋のーあ
らの羽ふさこは吹風も強て
始をつまらああ舟をり

松凡に子のありけりまのりて
あひもよも松のせんちよほて
まがうしやましも夏のうき
ふまんと思ふのいらをくや
ら吹のむ深衣のよあけて
むるのちの歌よりの若きま
まおらんとあまこのつる相
融のおと急ひすころりたり
極電の極廻とや釣ぬらん
心の茶のこよ海のちのまよ
をぬぐりの杖は梢はなるやとて
なほりてをぬる

よの朝あまにいらあさ
あまのこしあまのけりあま
横笛やたてよあけとよあ
も〜りのこし思ふあまの月
腹のいこもやすれこもれ
こらばこらも命丸で合はん
知のあやいろはもまろくひん
ちりぬるを和加吹上のを満
東路の果とねも人と其を
て〜のようは佐神の舟は
実盛るあまやふのくかの里
形負舞の名いの深様あま
はあの色よと〜あまの

聖王や虎洲神のよき道
垢まじりもつた月の影
土用は耳の尻をもやし
時雨あるとも雲いふとも
舟の音響あつた人の声
て秋さつてさつさつと
月夜や束のねらえぬん
おどひれおどひれいけ
百もや隅田河原を渡る

後と神

都をいひてさつ川の下の舟
やうしていひてん秋風を吹

あつけなく歌者らちか合
十ののすまのつ影の影
ねへもねつまぬへさたの人は
やうしてさつさつとさつさつ
餅もいひてさつさつと
梅菜いひてさつさつと
悉た太子のすつさつと
やうさつさつとさつさつと
あつひ双紙いりりさつさつと
むらさき色あつさつと
おの目さつさつとさつさつと
さつさつとさつさつと

村西のおしよるける約の角
うしひふりつと夕暮の光

言外

ぬい五臓を養生のころ
そのハハの後の山やくとん
人いなもてお有り一考既
ちひさくしてぬて孫の穴のそ
世の中はけぬきのなくのぞん
こまじや一めいやう一こたり
床の音ちのきつりくたを
なごの障もあきう一秋の山

さしあがりあはれあはれ

白くもたきくころもたきく

此品をんかきをうんのあるは守武
老翁い未末と悟らるる君を
くそは日まきてまよの脚を唯
て付たあるまほくくへれあ一付
あといをけりけりあき面とま
席をこそく今ねて是とそころ
よあまたまふ誠心何やさう
く感情は軽なる足連あの脚
よせりくどげける中古の能う
まなうらんるう肩あはまりえ
うげなるのふく一但頃日は尚

地はよめていましてあそぶまて
かゝるたてまつりとも同座なり
とも塵をぬるやとのりり
あまさい

信守のつらぬるがこゝろ

河原や栢よよする五月夜 春の浪
施儀鬼棚の者のむのまを任使
つるの尻や嵐の入りて勢日かま
峰の巢や款のえまてぬる志有
何日何時のまろさこ衣の人
秋のつらぬるがこゝろ 一誠

よそのつらぬるがこゝろ 一誠
天水マなごい影を猫のま 志斗
茶喰老の幸母よこえり 以勢
葎踐の影ゆて依りまのぬ雅斗
雑巾や松の木扱一しこれ信章
お素くやおあき里のニ云月あ昌
影をまけて月をのふるや等の 忠入
かよふるの卒の鼻が下 五平
五月雨を又富士ののりき登 体き
いよまをまや月がやまめ者の 巖の
地黄坊や七日をりてむの流吞舟
晩年の白として旧友 志知
あまはや雨白雲路あの一ら

山峯下風志く今めきん桂の沾木
さくけ食妹の垣根いあまはりん棘
澁柳マ新たりのたぬの 秋賀や
杉栂や垣ふととふ跡の海岫雲
たを閉きとんも白やとと鶴の知る
肩のむは回らまふ家の幕を金琴
才家板や柳よの合ひ細豆の糸め流
まはさいみやむは吹るせ若神の巻法
いよとんふきい雷を、子守春沈
桐の美ふやうけて熟るくぬり及琥珀
掛香マ鼻よ訓く吉地紙曲言

一玄比二三小守裏店へ行く身て
中よりハ我儂踏とすくす
三十余年よを功あるやう
よいらまし一内は所りとも有
いばりやよとして更志く〜とあ
なち〜是を思ひあ〜とすぬ
其時々の風はあこらら〜とせら
慰を〜つらげゆ〜は儂〜り
され〜利徳もあ〜ぬ〜と性
こは〜付〜んい偏愚癡の〜也
さら〜たのちのさ〜よのがまん
と思ふよその川〜と老〜らす
只此れと傳はた〜よふ女との

酒のいなききしこころの残
崎田をたの里人今たのむき
由とのたすおろ強ひまゝの義
若よりてぬき色のいらぬ柳
裏の油にしくためきて目
世は悲道よりおえつて是
とせぬ人のまゝつらもちあう
ぬやうよちありゆくぬし和音の
一船とゆいけおとさしたはた
我拳をのびけあま及の夕
とぬふん流しひは袖よりおれ
昔のまゝのやゆあはまゝつこ
おはつとつらふ小歌は空をたこ
このと世やうちのぬく地をせつこ
風いとめぐる塩見よりな残涼
風いぬみ木まぐり誰ゆるさだ
ののおこるひ男の上はふまて
うんずる折る節日向流のにお
船ののきとおとろりしあ
る星の光いづつうよとつる年
月をせめてあつのおまりにや
るよりあるむかひとらゝみ流
まゝの類無流法日夜東ま指
掉の衣よとらゝつら波依の
月夜のつよを麓山の松の時雨
今戸の携をかゝる者しこあふ

奇のいふ事いふして御座る世は
まらうりと夢ゆ総万ヤもすま
はは(あ)はまんと踏くむゆは連
佛のつげあざやのまをまりん
と字うら付うらまをまはそむ
く玉とんが御座るとせらまける
とうたう世おもむまをてちる武
の凡ねをうらまをを思入して
やうのまをまひ給ふあゝく當
時ハげあまるとあまうり好ざらうり
斗(し)もより夜の千句のま
後程の馬は催さるゝはあゝ寸
大神まへ清教の子細ありて只
吾は海屋すと付まを法まり
たるあゝくやとすのうらまを
やらうくとらんこまうり

一身式千句巻以百韻一句附

本行

昔 中古 古時

末く准之

鳥梅やうらくも卯の春 あま
ほろ糸は篠をぬ袖
とまらうら海屋のまを
りまもくの鳥うらひま

若此能智いりまもやまぬん
 四つ足のだふくしや言ほし
 のとのちの風ふくろくま山たて
 軒の下ある流してあるく
 のふてとよと曙のそ
 目を流し一のこは月影
 新酒は夕のたの酔や
 秋の草かもふきて花はら
 槿のむきけくま志ぬるらん
 秋の時雨のふるさ油垣
 世はよわらる虫の騒ぐ
 是を瘡の松乃を落けさ
 ぬやどりする岩たやのくま

夕風も貝つめて陽の波

村雨のほまほかけるるの角

牛の年つ運むるは又致して

義が若衆をとましく歌う

かこつありうとし夕の暮るの夜

灯のくままほほほはしぬ友を

かんやまは又とあへんく暗の

何やもんふこつがふるるはうて

たえす隣の格氣のさうひ

又是りの心かまのめが

くひ付やどはおもをゆるらり

むのくしての念いぬ茶屋の餅

二朋を味ひてまゝする恋

梢より来て社ありき大橋

かきむすそやあさく猶

短冊むろふ赤かざのま

猿まふこまてむをる方注

若お山よりぬおぬまよ

神頼敏をよせたる公を震

さぬ非やあ道赤岩誘あらん

松山株塔よりら、あるる

是せうと云ふあのみま凡

人いざらしくよま日おのけら

ほをの上もれ判付んくせき

凡下へとふ火のこころをき捨

たいらいとい若はあをりた

若士ゆへある寺へかどま

獅子代をさきいすけう乳を

袖赤志海邊とくい志やうまやう

拾ひてあゆりるる思答よ

他方よしたのがお道のれ本仏

夕時雨親孝なりのをき井は

雷さらく松陰よよ休

衣巻を志ぬる鍋はるの聲

山峯の嵐の論語ふく声

十徳の細りこもる山念よ

山の裾を十有五すえ七の月

滝の糸文庫のをとや路くみ

比兵尼や取智へ膝急のら存

うらとよ飛つたあつたき
わのよふのころりばそのか
星合の空を思ふよのよ日雲
いさ死のを退るよあれて
ちまうくく子や古脚よあす
うまうさうあつためがやぶ
救行の泣とよすう一口
七折といふもわりのころりあり
價をとた身をたてをので
こころがら法壇のこけて眠
五月より六月はあつた強もあし
大工の年をたさがるは比
盤の首と蒲坂のよるんる

加茂の競るよ油いぬきくらり
ういありとあつた社何れ
木の膝ははるあてさがる一
お基さすおまゝ人は雨ふりて
鼓がとくくさなが腰掛
といまゝ我を流統あつる者
折で吹こし森のこころり
たまおのころり中まもあつ
一よ切敷をきんだんの袋
下美あつたころりあつた
あつたころりあつたあつた
よふいあつたあつたあつた
あつたころりあつたあつた

あき瑞と情む胸よ軟解
富士上風をまを拂て白万里
為軸の筆よまてうける文をじ
外をちのふるはとをむきて
たよりのせうら裏透の風
うの毛をだまてる有てよ
寂をよく所味してさせあつ
例の上と志うてや月のひん
毎火よりんくうりまむすを
左高依高ちののりうらひ
例の笑いとまなよぬとも
臆病さうなまの 大羽
鷹鷲や谷の樹夜の事

まじくらの金後論やむ凡
白旗をふるひまき鹿けりき
いやり疫癘をくろく里く
三界にお霊暗をくろくをす
吾よせさのいなり志りしやて
落人の木情の多し宿と
吾よ嵐毎滅の貝ふのんを
寺がや寺よも相をいたをん
弘折言よそく入ぬ宝貝舟
地るつのは前豆を粉よ
のいらの魁いそく人ひやうち
なでこの色はあまゆりの
壇電よりの夜をん罪人た

まの男赤なるめつて群くよ
船どうのしく令をおこせ
評判すある一寸法師
十之夜とい月をいふらむ
面白く露をむきかへる海
秋の風より花をさうけ
よめ入のを吹凡は芳晴く
山のいろくさるたて深
行列ごと付れ糸いと萩
床の香ちのさほりくこり
秋がほひのりまてもおほり
城らや明えおきころ中の口
をらの際をおきしー秋の山

とけりもぬる堀田前をん
昔日布をよこして物大振うら
め房を(と)ととのゑの志塚
おなじや思ひ死する若の下
まよひかたかこむてい入
思ふるやむの都よをけぬらん
白ふもちるもかぶ栴檀
すあいはぬも根巻の袖
のさくらら戸な袖いぬり
はさししくさい若らば立
晴いた現あまた別まのる
妻雨のふせいにやこへ笑を
んのとまぬ旅のまのをひ

諸礼儀の尋ねあり

白濁のいよ淋しからあり

なまひして左のし流す左儀

松重山ありし此のいよ

はるへも誰のくさともなる

不着風ありし人の口弁

者大かをまゐる安部の山姥

白界さへまきよなるまらげより

一面よかき乱しける後陰

かつらうしとらん世を月

のそりやくおとも有せ奈ま

青後松葉の内り床しよ

及隨の昔のいこし入道

はるまきりすか山陸の庵

堤と谷のおりて折切

滝りの石皿あまるとらん

松母僧とくしりいりしらん

墨染の袖とけを尺どろ

一口よのむ紀祿のあゝ海

とよも初よも油ありたり

阿蒙院の愈茶まい秘りも

よしは川んちる翁の二面

中分あといひたあへすり

はゆかきま人の版たち

くてよてあまはす土罐子

人などよれとあやうあらん

新まきとんりくさりく新
とんり

那川の氷い毒也笑東も

笑さしとあまたへいこと竹

餅くふ箸の揃きてのく中

比翼のちとてのさうなけ

あどくしうり友の夕暮る

汗れがせあつを流す川の如

り速ひ雲小尻のあつせい

目やんが熟ちまゝく怒りして

女唄よをのうらぶふね

は歌たうと兒月よと地神

唐の帝やうあかちるうん

曲最と惟りさして入ぬさや

溝堀とさくら揚たる父斯
あり

揚着ぬのほりやとくとおたさこ

ふきとうと乳も合ぬるまま

疫病うつして髪鏡はる

新ねを起守りうらみの海

えんとい我人旅ふとらうや

虫のおぬ不老の髪生ふら

茶よそつとつと者とあさ
たや

巾よあ切といたりつたいの

たり付の乾もいり目前

あさやのくくそとくもかきさ
を帳とめていおれと物ふら

おた何るまじやたととす別せお

人いね愛現よとつえすま
今たのあき泪あろく

せと親すまいあふたきす
石の火よそろたあぶるへき

川野の蕪の料紙と思懐て

ふくたの狸のふどり糸あは

くのきつ、破あまこぬるすらん

そろ泣とて泪こわをり

ぬん志や龍とぬー雨雲

懐紙も入び物思ふ くま

いんちきさるとそ月の月の丸

忍とつ蚊屋よらほぬても額難て

思てすい極とそらあつてそり

抱あけつこよまらこもす

さうりあゆもあがりの

あまこいさけらことの一やうま

のそめく踊の抱え揚ひ着

川の渚とお基あにすあび

八七のころのまよひ

妹を産くも子が自おいおか

けぬの字同始いころりは

携んまいこ河の坊は教んて

まの家申と候かきつたを

文巻のやまがはく大巖

二村もあいまありあり

子も流存りあふぬたて原

教公菖のふ笠はかりじし
 くまんとくうやのいあけとやあふ
 阿やーとまのん尺八の勢けん
 斬は沫がら天目のをを
 またの雨はすくまてあのと
 我洞人のとがめん目をつじ
 諸司代のお指紙きとるぬ
 茂土のとも羽のうこよこ五よりてくま
 魁とほろがす殿とのけぬ
 女もんようくひはせとゆり
 具足とけんは境の志らく糸
 心るこがかりて後すあうさよ
 小柑子雪平乞のすそや流けん

月と波をを晴とマタ荒
 倉取なを志との浦旁
 せと折ぬくむ火流星
 尾のせとハおもふねもをぬ
 武家おまぬとこれいあふ
 袴よりあつて山流はおとすいきて
 勢ふとを山寺よのいりらんおあ
 明ぬはおとすのほそ男入
 曉起の河関の砂ふ
 ぬのまやいすりせ色の片らあ
 布さらすころふ草の目新
 倉地や草より烟波よけあま
 久ふあふ子のまつけのすあ
よそ

ふとせのまらとらる烟は
ちざら虫の巢とらるま
さうとらんゆらけらの夕を
汐烟東風はすらく吹拂ひ
強筋は遠代大君おのり
らのまはらんとて
そよまゆめく越の白雪ん
はらむ眼はたどのこら山
そけたらち方の流あかく比
世業は後の朝としくま外實
そとより梅田の園さお娘
青柳のいとま記ましくも打拂
池のあうま入釣とげぬる

漂くとあつる 測明がたて

かくあまもころりの末
流を逃ふ余やの童のま
白やまがまる瘡を吐捨
たれなく地をとも唱流まき
こら水橋のぼ越るま
古木の掟とちる鏡別
あうあうまを命ありけま
炭焼の夕夕の烟あまき
浦嶋のお侍受する地ま
木のくいとらんより志をま
こ世をさふ怨のこらのも
をのともさうたんあらの夏

目の紅いあしの葉ふと那
 老の月の夜世と管む屋持
 十二灯あきんとすきかき
 を傳の海草とてやさるもん
 舟はたかさきか入る舟人
 あんたらのよき奥は塩尻
 松の葉こころよ志や〜する比
 松人の手中心を伝家よて
 斗る危の釣舟よは回の草
 夕階日百日たよりうろひて
 あうでむるくあるいあうき
 既うぶるを夜うろく月
 はづく〜くと淋〜かりやり

能の胃の飽らうくも何こぞ
 不仕合まつきたる宿をまきや
 柴の房をぞのささくを飲ぬん
 管見の氷の志〜衣を
 たら馬は歎おろ〜の凡
 ひえなるんあとも賤い志〜すか
 山陰よつまき布をを片おて
 雪の内松の本膳の若あう
 を〜をををあかりてい又うり返
 油は泪のうろ後おはに
 楊の下披〜マとらわうら
 そらのいんまも〜いあ
 つららたら羅のいんまあ
 いか

去凡比子画子と産て肥た、
 一三のんよりを命九やあひすん はきて
 縁文なす宿いのり
 むのの措くへかろのひを丁
 ちやうしと打てるハむさし
 とらぬる光源氏のお話
 天しめ年をちあふ守仕組
 のを

此二冊を鱗形と考ふるやこの形
 をあらしめ也 ▲のくちへさる
 中よ白鱗守此白鱗を悟る
 すんハ派借のぬある境よ又ち
 かしらんんん是と道守大意たの

はと

夫天地者似大極為心大極者無
 極也四時行萬物育矣人者
 以虚靈為心象理具萬事應
 矣是三者始亦必虚無自然
 而為靈用也后来勿為事物
 被疑滯也我道别名曰新活
 学之者似高志概律新情為
 分一之故也須高雄須逸整須天
 紋長者如巖龍短者如游虎
 瘦象若山澤之背肥象若
 在客貴勁兒若伏兵媚兒
 若嫉妓優狀若醉仙端狀若

爭臣是其要法也能達物情
而勿藏言物之於胸中如茲
則大化自配萬物云

延寶戊戌秋七月朔日武江

御城之林鹿談林沙彌

雪柴誌



